

山下宏明先生を送る

久保朝孝

本学文学部国文学科教授（大学院文学研究科国文学専攻兼任） 山下宏明先生が、定年により本年三月をもって御退職になる。

先生は名古屋大学文学部を御退官後、ただちに本学に赴任された。平成七年四月のことである。未だに忘れ得ぬこの年の一月一七日、先生のふるさと神戸は阪神淡路大震災によつて、甚大な被害を蒙つたのであつた。先生は復興まだならぬ故郷の人々の苦しみを思い、前任校の送別行事を一切お受けにならなかつたと聞く。今回は教職からまつたく身をお引きになることでもあり、前任校の方々をも含めて様々な形で御指導を受けた者があい集い、その御学恩に報謝する機会を設けたいと思い、それとなく御内意を伺つたが、ついに首肯されることはなかつた。先生なりの一つの筋の通し方であろうとの付度は、おそらく外れていないであらう。先生は私事に同僚又は学生を巻き込むことを、つねに自戒なさつていらした。今はお気持ちに従うほかあるまい。

先生は、私が今さら駄弁を弄するまでもなく、国文学研究なканずく軍記物語の泰斗であつて、その名声は国内は言うに及ばず隣国から広く欧米に及び、「世界の山下」として国文学界有数の存在である。その御経歴及び業績については、名古屋大学御退官時の「名古屋大学国語国文学」誌上に極めて詳細な一覧表が掲出され、またその後のものが本誌に掲載さ

れているので、我々は両誌を合わせ見ることによつてその偉大な全貌を窺うことができる。その質量たるや、空前にして絶後と言うべきであろう。本学在任中の一二年間の論文数だけに限つてみても、実に四七編に及ぶ。その他御著書及び書評等を加えれば、これが到底人間の仕業と思えないのは一人私のみであろうか。しかも、それら一編一編の論考が、常に斬新な問題意識と方法をもつて執筆され、当該課題に対する既往の研究状況に対する異議申し立てと、意表を突く大胆な提案に満ち満ちているのである。常に挑戦者意識を失わない先生の研究姿勢は、たとえば論文の掲載誌を眺めるだけでも瞬時に了解できるであろう。七〇歳を過ぎてなお、審査を要する学界誌への投稿を続けておいでになる。先生は、後学の私どもにとつて、未だその足下にも及ばない大きな目標である。

また、先生は研究面のみならず、大学行政という点でも本学に大きな足跡を残して下さつた。大学院文学研究科長として各種規程及び手続き等の整備と、文学研究科開設一〇周年記念誌の刊行を陣頭に立つて指揮されたことが今思い出される。当時その傍らにあつたものとして、いささか懐旧の情を禁じ得ないところではある。しかしながら、先生が研究科長として果たされた最大の功績は、本学における博士学位の審査・授与の開始と定着化であつた。本学初の大学院である文学研究科は平成元年に修士課程を、同三年に博士課程を開設してはいたが、まだ博士第一号の誕生を見ていなかった。それが、先生が文学研究科長職におつきになることにより、審査の手続き及び手順、そして博士論文としての基準が明確に示されることになり、これによりまず英文学専攻から課程博士第一号が生れ、引き続き同専攻から論文博士が三人、さらに図書館情報学専攻からも論文博士が誕生したのであつた。念願の国文学専攻からは、先生がその職を退かれてからではあつたが、平成一五年九月に課程博士と論文博士の学位授与を行うことができた。しかも、この課程博士は学部から本学で学んだ生え抜き第一号でもあつた。その後論文博士が二人続いたが、これも先生がその道筋を整えておいで下さつたおかげである。先生は高等教育機関として、そして資格認定機関としての大学院の、すぐれた指導者であつた。

さらに、教育者としての先生のお姿にも触れなければなるまい。弱輩非才の私がこう申しあげるのはまことに失礼に当

たるとは重々承知していながらも、正直な思いを述べざるを得まい。先生はまことに情熱的な教師であり、また常に謙虚さを失うことがなかったと。大学院生の研究テーマは、先生にとつては他人事ではないようで、たいていいつの間にか同一テーマで学生と張り合い追い越してしまわれる。学会出席直後の授業は、まずそこで行われた研究発表への評価から始まる。レポート・試験は丹念に読まれて添削され、すぐれた解答は次の授業で取り上げて賞賛される。板書事項のノートを取り方まで指導される（ノートが集められ書き込み添削が行われる）。以上のような学生の証言もあるが、先生は常に食欲に授業方法の改善に取り組んでいらした。前任校とは必ずしも重ならない教育環境の中で、現在目前にしている学生の授業理解の向上ということをいつもお考えであった。他の教員の授業の中にすぐれた方法を見出されると、早速それを取り入れようとなさるお姿を拝見したのは一再ではない。教育は自己変革を促す行為であるといわれる。であるならば、教師こそは最も自己変革的でなければならぬだろう。この点において、先生は紛れもなく本物の教師であった。その姿勢において、我々の規範であった。

すでに先生は、御蔵書の相当部分をオーストラリアのシドニー及びモナシユ大学に、さらには韓国の木浦及び群山大学に寄贈されているとお聞きする。しかしもう一方では、御退職後の研究活動についてもはつきりとした御予定がおりのようにある。今春喜寿を迎えられたとは言いながら、体力においても我々を遥かに凌駕する勢いなお衰えない先生に、今後も御健勝でというような月並みな挨拶は似合うまい。

先生の次の御著書の刊行を楽しみにお待ちしております。これまで賜った様々な御恩に対して心より厚く御礼申しあげるほかはない。

（文学部国文学科・大学院文学研究科国文学専攻主任）